

菅原孝標女と源氏物語

上野 英二

永承元年（一〇四六）十月二十五日、三十九歳の菅原孝標女は、折からの、新帝後冷泉天皇の大嘗会に際しての世上の喧騒をよそに、独り長谷寺参詣の旅路についた。「一代に一度の見物にて、田舎世界の人だに見るものを、月日多かり、その日も京をふり出でて行かむも、いとものぐるほしく、流れての物語ともなりぬべきことなり」（『更級日記』⁽¹⁾）との非難をものともせず、敢然、彼女が初瀬詣に旅立つたのには彼女なりの理由があった。「物見て何にかはせむ。かゝる折に詣でむ志を、さりともしなむ。必ず仏の御しるしを見む」。一時の興に目を楽しませて何になろう、一世一代の盛儀を見物しようという心をふり切つて参詣してこそ、仏の利益にもあずかれるというもの⁽²⁾。

いささか虫のよい論理ではあるけれども、かねて宮廷の風雅にあこがれ、永く物語の世界に耽溺してきた彼女

にしてみれば、それは格段の進境と言うべきであらう。

すでに、「物語のこともうちたえ忘られて」、「などで多くの年月をいたづらにて臥し起きしに、行ひをも物語をもせざりけむ、このあましごとゝても、思ひしことゝもは、この世にあんべかりけることゝもなりや」、「あな、ものぐるほし、いかによしなかりける心なり」と、物語耽溺からの回心を経た孝標女の心中期するところは、「物見て何にかはせむ」。今や「后の位も何にかはせむ」と、物語に熱中した少女時代の日常は、はるか昔日の思い出になつていた。

けれども、初瀬詣の一行がいざ京を立ち、宇治川にさしかかるあたりになると、にわかに物語への感興が彼女の心に蘇⁽³⁾つた。

無期にえ渡らで、つくぐと見るに、紫の物語に宇治の宮の娘どものことあるを、いかなる所なればそこにしも住ませたるならむとゆかしく思ひし所ぞかし、げにをかしき所かなと思ひつゝ、からうして渡りて、殿の御領所の宇治殿を入りて見るにも、浮舟の女君のかゝる所にやありけむなど、まづ思ひ出でらる。

宇治は『源氏物語』宇治十帖の舞台。

物語のことをのみ心にしめて、(中略)光の源氏の夕顔、宇治の大将の浮舟の女君のやうにこそあらめと思ひける

浮舟の女君のやうに山里に隠し据ゑられて、花、紅葉、月、雪を眺めて、いと心細げにて、めでたからむ御文などを時々待ち見などこそせめ」とばかり思ひつゝけ、あらしごとにもおぼえけり。

と、あこがれ続けた浮舟⁽⁴⁾の登場する宇治を訪れたならば、「よしなかりける心」とは知りつつも、『源氏物語』浮

舟のことどもが想い出されるのは無理からぬことであつたであろう。しかも、孝標女の旅は初瀬詣の旅。それは、『常陸の前司殿の姫君の、初瀬の御寺に詣で、戻り給へるなり。始めもこ、(宇治)に宿り給へるなり』と、『源氏物語』(宿木)が浮舟と薫との邂逅を語る、初瀬詣と同じ旅路でもあつた。

「げにをかしき所かな」、「浮舟の女君のかゝる所にやありけむ」と、彼女はしばしの感慨に耽つた。「このあらましごとゝても、思ひしことゝもは、この世にあんべかりけることゝもなりや」という反省など忘れ去られてしまつたかのである。

しかし、冷静に考えるならば、宇治に浮舟がいたというのは、『源氏物語』作中でのことであり、眼前の宇治、宇治殿に「浮舟の女君」が実在したわけではない。孝標女は、物語と現実とを混同してしまつてゐる。

確かに『源氏物語』宇治十帖は、『花鳥余情』が、

河原左大臣融の別業宇治郷にあり。陽成天皇しばらくこの所におはしましけり。宇治院といふ所なり。

宇治院は平等院をいふべし。

(椎本)

など、準拠を示すように、現実の宇治に舞台をとり、あたかもそこで物語が実際に展開したように書かれてはゐる。けれども、『源氏物語』は虚構の物語なのであつて、いかに描写に生彩があろうとも、その作中人物をあたかもかつて実在したかのように思うのは、やはり錯覚でしかない。

孝標女は、『源氏物語』の術中にはまつてゐたと評すべきか。

物語憧憬からの回心を経て、「このあらましごとゝても、思ひしことゝもは、この世にあんべかりけることゝもなりや」と言つてはいても、なお『源氏物語』は孝標女にとつては、物語以上の存在なのではなかつたらうか。

長谷寺への参詣の旅の途次でありながら、浮舟への想いが沸々と湧き上るところからすれば、幼い頃の『源氏物語』の印象がどれほど強いものであつたか、想像に余りある。

孝標女は浮舟にあこがれ、将来浮舟のようになりたいと思ひ続け、その実現を「あらましごと」にもおぼえけり」と信じていたが、『源氏物語』は彼女にとって、まさに事実あり得ること、「あらましごと」であつたのである。

そこには、例えば『源氏物語』自身が螢の巻の物語論に、

あなむつかし。女こそものうるさがらず、人に欺かれむと生まれたるものなれ。こゝらの中にまことはいと少なからむを、かつ知るく、かゝるすぐるごとに心をうつし、はかられ給ひて

と述べ、「いつはり」と言い、「そらごと」と明言したような、物語というものに対する冷静な認識など、その片鱗さえ見出せない。

孝標女は『源氏物語』を、「あらましごと」として、ひたすら信じたのであつた。

一一

孝標女が、「あらましごと」と信じた『源氏物語』へのあこがれは、一面できわめてロマンティックなものであつた。

物語のことをのみ心にしめて、我はこのごろわろきぞかし、盛りにならばかたちも限りなくよく、髪もいみじく長くなりなむ。光の源氏の夕顔、宇治の大将の浮舟の女君のやうにこそあらめと思ひける

『源氏物語』に登場する多くの女君の中でも、浮舟と夕顔の二人に、孝標女はとり分け心魅かれていたが、それには条件が付いた。すなわち、「光の源氏の夕顔」、「宇治の大将の浮舟」。それぞれは、光源氏、薫大将という理想の男君によつて愛されている、夕顔であり浮舟なのであった。孝標女にとつて、『源氏物語』作中の女君へのあこがれは、同時に美しい恋物語へのあこがれでもあったのである。

別ても、孝標女がひたすらあこがれたのは、浮舟であった。

やや長じて、「盛り」の頃の孝標女の理想と言えば、「浮舟の女君」ただ一人のあり方にその焦点は絞られてゆく。

「いみじくやむごとなく、かたちありさま、物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年に一たびにても通はし奉りて、浮舟の女君のやうに山里に隠し据ゑられて、花、紅葉、月、雪を眺めて、いと心細げにて、めでたからむ御文などを時々待ち見などこそせめ」とばかり思ひつけ、あましごとにもおほえけり。

「年に一たび」、「時々」とは言いながら、孝標女の浮舟へのあこがれは、一層深化し、きわめて具体的なものになっている。

一、「山里に」、二、「隠し据ゑられ」、三、「花、紅葉、月、雪を眺め」、四、「心細げに」、そうして「めでたからむ御文などを時々待ち見など」。実に優美にして精細な要件が並べたてられることになる。

確かに『源氏物語』作中の浮舟は、

宇治といふ所に、よしある山里持給へりける⁽⁶⁾

女をなむ隠し据ゑさせ給へる

(橋姫)

(浮舟)

花、紅葉、水の流れにも、心をやる便りによせて、いとゞしく眺め給ふよりほかのことなし。

(橋姫)

幸ひ人の、さすがに心細くてあ給へる

(浮舟)

さばかりめでたき御紙使ひ、かたじけなき御言葉を尽させ給へる⁽⁷⁾

(浮舟)

という叙述のもとに描かれている。その一つ一つをなぞりながら、孝標女は貴公子の思われ人としての自らを夢想して、我身を浮舟に重ねた。

しかも、その相手役には、作中に配された「宇治の大将」薰ではなく、『源氏物語』前編の主人公「光源氏」を持ち来たる。『源氏物語』結末のヒロインに、『源氏物語』最高のヒーローを対して、我身を夢想するなど、余りに身勝手に、自己陶醉に過ぎようか。

孝標女は、ひたすら美しい恋の物語として『源氏物語』にあこがれたのである。言葉の通用に従うならば、それをロマンティズムと呼んでもよいかも知れない。

それがあこがれとしていかに典型的なものであつたか。⁽⁸⁾孝標女の夢想と殆ど同じ夢は、後代、『十番物あらそひ』にも語られている。

たとへば、光源氏にても、在五中将にても、言ひ伝へしやうに、かたちなまめいたらん人に思はれて、少し都離れたる所に据え置かれ、静かなる春のあけぼの、さびしき秋の夕には、空吹く風峰に見ゆらんと眺め暮らし、たゞならぬ萩の上風に心を動かし、更けゆく鐘を恨み、待つ夜ながらの月をかこちなどして、たまさかに待ち居たらんこゝちは、いかにめづらしうも、あかずあはれにもあらまし

貴公子との、ただただ美しい恋物語。そのヒロインになることに、孝標女もまたあこがれたのであつた。孝標

女にとって『源氏物語』とは、言葉本来の意味において、まさしくロマンスと呼ぶべきものであった。

三

『源氏物語』作中に女君多しと言えども、孝標女があこがれたのは、前編の女主人公とも言うべき紫上でもなければ、光源氏の思いを一身に受けた悲劇のヒロイン、藤壺でもなかった。『源氏物語』に多くの女君が登場するにもかかわらず、とり分け孝標女があこがれたのが、浮舟であり、夕顔であったことは、やはり注意を要する。浮舟、夕顔の「心細げ」なありさまへの、孝標女の好みは別としても、孝標女には、浮舟や夕顔にあこがれる、別の理由があつた。

例えば、浮舟について。

源氏物語中で浮舟といふ女性は胤は高貴な系をひきながら、しかも自分は作者と同様、地方官介の身分の娘である。恐らく作者は、この階級共通の点に共感を先づ催したのであらう。

（『菅原孝標女を語る』、『岡本かの子全集』所収）

岡本かの子も言うように、孝標女にとって、「階級共通」という要素は、やはり浮舟にあこがれた重要な契機となつていたに違いない。孝標女は、上総介、常陸介の娘、父の任国上総で育つた。浮舟もまた生まれこそ宇治八宮の血を引きはするものの、陸奥守、常陸介を継父とし、やはり常陸で成長した。平安朝という身分制社会において、身分、階級の問題は、やはり動かし難い前提であつたはずである。先帝の四宮の藤壺、式部卿宮の姫君紫

上などは、孝標女如きの、あこがれて到底あこがれ得べくもない身分の女君たちであつたのだ。

「藤壺」、あるいは「梅壺」という名は、後年の『更級日記』の、宮中見聞の記述の中に見出すことが出来る。

またの夜も、月のいと明かきに藤壺の東の戸を押しあけて、さべき人々物語しつ、月を眺むるに、梅壺の女御の登らせ給ふなる音なひ、いみじく心にく、優なるにも、故宮のおはします世ならましかばかやうに登らせ給はましなど、人々言ひ出づる、げにいとあはれなりかし。

しかし、現実の「藤壺」は、孝標女の主人筋の御座所。「梅壺」に至つては、孝標女風情には到底手の届かぬ「音なひ」としてしか描かれることはない。「藤壺」、「梅壺」という皇妃の地位は、「後の位も何にかはせむ」という勇ましい思いとは裏腹に、孝標女からは、まったく隔絶した存在でしかなかった。

だから、藤壺にしても六条御息所にしても、そして例えば紫上にしても、孝標女にとっては、現実的には望むべくもない、雲の上の存在であつたのである。同じ『源氏物語』作中の人物であつても、孝標女にとっては、藤壺なり紫上という女君たちは、まったく非現実的な意味しか持たなかつた。しかしだからこそ、浮舟などの階級の女君が、かえつて現実的なあこがれの対象として、孝標女などには受けとられることになつたに違いないのである。

孝標女の浮舟へのあこがれは、一介の受領常陸介の娘という彼女の現実を、正確に反映している。一見、ひたすらロマンティックに終始するようでありながら、孝標女の浮舟憧憬は、実は彼女なりの現実を踏まえた所に生まれたものであつた。

夕顔もまた同様。三位中将を父としながら、しかしこの人も、その庇護を離れ、陋屋に身を潜めていたところ

を光源氏に見出されたのであり、未だ孝標女にも手の届く範囲の階層に属していたと見てよい。

浮舟へのあこがれにしても、夕顔へのそれにしても、孝標女が彼らにあこがれたのは、『源氏物語』作中にある、それが孝標女にも手の届く、現実的な存在であつたからに他ならない。女として生まれた以上、貴人に見染められるという僥倖に恵まれることもあるであらう。しかし、生来身に負う身分上の制約は、やはり厳然として存在している。存在している以上、それを無視した夢想は所詮妄想に過ぎない。

孝標女のロマンティズムは決して妄想ではなかつた。かなりの程度自己陶酔的で、甘美に過ぎるとは言え、それはそれなりに、平安朝の現実根ざすものであつた。

『源氏物語』帚木の巻。雨夜の品定の一節に言う、

「なり登れども、もとよりさるべき筋ならぬは、世人の思へることも、さは言へどなほことなり。また、もとはやむごとなき筋なれど、世に経るたつき少なく、時世に移ろひておぼえ衰へぬれば、心は心として事足らず、わろびたることゝも出で来るわざなめれば、とりぐにことわりて、中の品にぞ置くべき。受領と言ひて人の国のことにか、づらひ営みて、品定まりたるなかにも、またきざみくありて、中の品のけしうはあらぬ、選り出でつべきころほひなり。なまぐの上達部よりも、非参議の四位どもの、世のおぼえ口惜しからず、もとの根ざし卑しからぬ、安らかに身をもてなし振る舞ひたる、いとかはらかなりや。家の内に足らぬことなどはた、なかめるまゝに、はぶかずまばゆきまでもてかしづける娘などの、落しめがたく生ひ出づるもあまたあるべし。宮仕へに出で立ちて、思ひかけぬ幸ひ取り出づる例ども多かりかし」

「中の品」の女、「受領」の娘が称揚される、左馬頭のこの発言に、孝標女は恐らく快哉を叫んだはずである。

夕顔も、浮舟も、そして何より孝標女が、まさにこの「中の品」の女の典型なのであった。

「中の品」の女の物語を拾う限り、『源氏物語』は、孝標女にとって身近な存在であった。まさにそれは現実の身に起り得ることであつた。孝標女が、『源氏物語』作中の夕顔に魅かれ、浮舟にあこがれたのは、単にそれが美しい物語であつたからではない。孝標女にとってそれは、「あらましごと」と信じられる、十分に現実的なことであつたからに他ならない。それが幼い孝標女にとつての『源氏物語』であつた。ロマンスは「あらましごと」として信じられたのである。

四

このあらましごと、でも、思ひし事どもは、この世にあんべかりけることゝもなりや、光源氏ばかりの人はこの世におはしけりやは、薫大将の宇治に隠し据ゑ給ふべきもなき世なり、

浮舟のようになりたい。それを「あらましごと」としてひたすら願つた孝標女であつたが、しかし、そういう幸運はいつまで待つても訪れてはくれなかつた。現実には、彼女の期待に反して、いささか非情なものであつた。

孝標女にとって、浮舟のようになるということは「あらましごと」であつたから、その確信を裏切られた落胆は想像に余りある。それは恐らく、孝標女その人の世界観、人生観を根底から覆すほどの事件であつたはずである。

それまで信じて疑わず、希望をつないできた物語なるものは、幻想に過ぎなかつた。彼女の思惑とはまったく

別の姿で現に存在していた現実との出会いは、彼女の人生をまったく変えてしまった。

これを契機に、孝標女の人生上の関心は、次第に現実的な方向に傾いてゆく。

官仕え、結婚、出産、子育てと、次々に現実が現実として押し寄せて来た。その合間、一転彼女は、物語に精を出すことになる。

その頃の孝標女の念願と言えば、物語にうつつを抜かしていた頃とはうって変って、すこぶる現実的なものに変貌している。

今はひとへに豊かなる勢ひになりて、双葉の人をも思ふさまにかしづきおほしたて、我身もみくらの山に積み余るばかりにて、後の世までのことを思はむと思ひ励みて、十一月の二十余日、石山に参る。

今度は、石山寺への参詣であるが、その念ずるところ、都合四条。いずれもきわめて世俗的なものになっている。

回心以前の、かつての孝標女の抱いていたロマンティックな願いから見れば、まさに雲泥の違い。とても同一人物のものとは考えられない程である。

けれども、このことは、溯つて孝標女の少女時代の『源氏物語』へのあこがれ、ロマンティシズムの意味について、再考すべき材料を与えてくれている。

そもそも冷静に振り返るならば、幼い頃の孝標女の物語へのあこがれなるものは、ロマンティックなものではあつても、その身分にそくする限り、非現実的なものでは決してなかつた。そればかりか、その頃の彼女の『源氏物語』への関心には、すぐれて世俗的なものがあつた形跡さえ見出されるのである。と言うのも、幼い頃の孝

標女は、浮舟、夕顔に加えて、明石御方の人生にも大きな関心を寄せていたふしがあるからである。

からうして思ひよることは、「いみじくやむごとなく、かたちありさま、物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、

と、幼いあこがれを『源氏物語』に結んでいた頃、父孝標が十二年の逼塞の後、待望の常陸介に任ぜられることがあつた。その前後のことを、孝標女はこう記している。続く一節、

親となりなば、いみじくやむごとなく我身もなりなむなど、たゞゆくへなきことをうち思ひ過すに、親からうして、遙かに遠き東になりて、「年頃はいつしか思ふやうに近き所になりたらば、まづ胸あくばかりかしづきたて、率て下りて、海山のけしきも見せ、それをばさるものにて、我身よりも高うもてなしかしづきて見むとこそ思ひつれ、我も人も宿世の拙かりければ、あり／＼てかく遙かなる国になりたり。幼かりし時、東の国に率て下りてだに、こゝちもいさゝか悪しければ、これをやこの国に見捨て、惑はむとすらむと思ふ

娘の身の上を思いやる父孝標の愛情切々たる一節であるが、しかしこのあたりの『更級日記』の記述には、『源氏物語』明石の巻の影響が色濃くうかがわれる。

我身よりも高うもてなしかしづきて見むとこそ思ひつれ、我も人も宿世の拙かりければ、あり／＼てかく遙かなる国になりたり。

に対して、『源氏物語』には、⁽¹⁰⁾

たゞこの人を高き本意叶へ給へとなむ念じ侍る。前の世の契り拙くてこそ、かく口惜しき山がつとなり侍り

けめ、

という、よく似た一節が見出される。

娘に対する孝標の言葉は、明石御方に対する父明石入道の言葉に、そのまま重なっている。⁽¹¹⁾大臣の子として生まれながら、「世のひが者」(若紫)であつた明石入道は、播磨守を最後に出家したが、娘について「高き本意」という思いをこの世に残していた。一方、孝標も先祖をたどるならば、由緒正しき右大臣菅原道真四代の裔、自らは常陸介に終わるにしても、やはり女子には「我身より高うもてなしかしづきて見む」という期待を寄せたのであつた。

『更級日記』の記す孝標の言葉は、『源氏物語』明石入道の口吻を借りていと言つても過言ではないのではないか。孝標が実際どう言つたかはいずれにしても、孝標女が父を明石入道になぞらえていたことは、少なくとも動かないのではないか。

孝標は、

いつしか思ふやうに近き所になりたらば、まづ胸あくばかりかしづきたて、率て下りて、海山のけしきも見せ、それをばさるものにて、我身よりも高うもてなしかしづきて見むとこそ思ひつれ、我も人も宿世の拙かりければ、

と述べているが、『源氏物語』松風の巻、光源氏に見出されて上京する明石御方との別れに際して、明石入道は次のように述べている。

かゝる人の国に思ひ下り侍りしことも、たゞ君の御ためと、思ふやうに明け暮れの御かしづきも心に叶ふや

うもやと、思ひ給へ立ちしかど、身の拙かりける際の思ひ知らるゝこと多かりしかば、

あるいは、孝標は娘の身を案じて、

今はまいて、大人になりたるを率て下りて、我が命も知らず、京の内にてさすらへむは例のこと、東の国、田舎人になりてまどはむ、いみじかるべし。

と続けるが、松風の巻の明石入道もまた、同じ思いを娘に対して抱いていた。

君のやうく大人び給ひ、もの思ほし知るべきに添へては、などかう口惜しき世界にて錦を隠し聞ゆらむと、心の闇晴れ間なく嘆きわたり侍しまゝに、

子を思う親の思いは誰しも同じではあろうけれど、これほどの類似は偶然の所産ではないであろう。

これに先立つ部分の、

近き所になりたらば（中略）率て下りて、海山のけしきも見せ、

によく似た文章も『源氏物語』に見出せる。

人の国などに侍る海山のありさまなどを御覽ぜさせて侍らば、（中略）近き所には、播磨の明石の浦こそ、なほことに侍れ。

これは、若紫の巻の一節であるが、他ならぬ明石御方の噂話へ続く一節であった。

『更級日記』のこのあたりの孝標の言葉は、『源氏物語』明石入道のそれが踏まえられていると見てよいであろう。ここでの孝標は明らかに、明石入道に見立てられている。

孝標が明石入道であるとするならば、孝標女は、当然明石御方ということになるであろう。孝標女には、自ら

を明石御方になぞらえるところがあつたのではないか。

孝標女の『源氏物語』へのあこがれと言えば、ひたすらロマンティックに、浮舟に夕顔というのが、本人の言でもあつたが、実際のところは、明石御方へのあこがれも大きかつたのではあるまいか。⁽¹²⁾

だとすれば、孝標女のロマンティズムなるものにわかに現実的な色彩を帯びてくることになる。

果報 明石の上

『源氏四十八ものたとへの事』が真先に挙げるように、『源氏物語』作中、第一の果報者、『源氏物語』の言葉で言えば、「さいはひ人」は明石御方であつた。彼女は、一介の受領、播磨前守の娘ではありながら、貴人に見染められ都に召し上げられ、子をなし、やがてその子は中宮となり東宮をもうけ、一族繁栄するという希有の「さいはひ」に恵まれた。

同じく田舎育ちの受領の娘の榮達、明石御方の「さいはひ」へのあこがれが、「いみじくやむごとなく、かたちありさま、物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年に一たびにても通はし奉りて」という孝標女の願望の底に無かつたかどうか。

本章始めに引用した、孝標女後年のきわめて現実的な願いを、すべて達成しているのも、『源氏物語』作中では、明石の一族であつた。

明石入道が、生涯をふり返って明石御方に託した遺書によれば、孝標女の所願四件、すべて満たされたことになつて⁽¹³⁾いる。

思ひのごと時にあひ給ふ。若君、国の母となり給ひて、願ひ満ち給はむ（中略）はるかに西の方、十萬億の

国隔てたる、九品の上の望み疑ひなくなり侍りぬれば、今はたゞ迎ふる蓮を待ち侍る（中略）この世の樂しみに添へても、後の世を忘れ給ふな。

（若菜上）

孝標女の願望の中にあつた「双葉の人」という言い方は、明石御方を指した、「荒磯陰に心苦しう思ひ聞えさせ侍りし双葉の松」（松風）という表現を襲うものであつたであらうし、「みくらの山に積み余るばかり」という願ひも、具体的には、『源氏物語』描くところの、「この世のまうけに、秋の田の実を刈りをさめ、残りの齡積むべき稲の倉町どもなど、をりく所につけたる見どころありてし集めたり」（明石）という明石入道の館を想ひ描いていたものであつたに違ひない。

孝標女後年の願望のありようから見る限り、彼女に『源氏物語』明石御方へのあこがれがあつたであらうことは、想像に難くない。浮舟、夕顔という、本人の自覚とは別に、弱年の孝標女の『源氏物語』憧憬の深層には、より世俗的な願ひが潜んでいたように思われる。

この想定が、孝標女後年の、あるいは日記執筆の頃の状況への解釈を、いたずらにその少女時代へ溯らせただけのものではないことは、恐らく次の例が証するであらう。

もう一度、弱年の孝標女の願望を検討する。

からうして思ひよることは、「いみじくやむごとなく、かたちありさま、物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年に一たびにても通はし奉りて、（中略）」とばかり思ひ続け、あらまし事にもおぼえけり。親となりなば、いみじうやむごとなく我身もなりなむなど、たゞゆくへなきことをうち思ひ過すに、親からうして、遙かに遠き東になりて、

以下前引の、孝標の発言に続くが、注意すべきは、当時彼女が、「いみじくやむごとなく我身もなりなむ」と思っていたことである。紛れもなく、これは栄達への願いであろう。一方で、『源氏物語』の光源氏や浮舟にあこがれながら、孝標女は、はつきりと世俗的な願望を抱いていた。

そして、さらに注意を払わなければならないことは、その願いがそのまま物語世界へのあこがれに連続するものであったということである。

「いみじくやむごとなく、かたちありさま、物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を」。「いみじくやむごとなく」という、我身にかけて願った、同じ言葉が、ここにも現れている。孝標女は、単にロマンティックなヒーローとして、光源氏のような男性の訪れを待望したのではなかった。一見何気なく置かれた「いみじくやむごとなく」という条件であるが、これはヒーローとしての身分を規定するのに終始するものでは決してなく、当時の彼女にとっては、我身を栄達に導いてくれるはずの、必要欠くべからざる、現実的要件なのでもあった。

光源氏や浮舟という、『源氏物語』に対する孝標女の幼いあこがれは、実のところ、出世栄達という世俗的な願いと表裏の関係にあったのである。

少女時代の、物語に対するロマンティックなあこがれと、一転ひたすら現実的なものになってしまった後年の願望と、物語憧憬からの回心の前後の、孝標女の心境の違いは、雲泥の違い程に大きい。しかし、その間に、明石御方という『源氏物語』作中の、致富栄達のヒロインへのあこがれを介在させて見るならば、たちまち両者は、一貫するものの別の現れとして、連続的に把握することが可能になって来る。

同時に、『更級日記』の全体を視野に入れ、孝標女の生涯を見わたすならば、その少女時代のロマンティシズ

ムの意味も、より明確になるであろう。「光の源氏の夕顔、宇治の大将の浮舟の女君のやうにこそあらめ」という、ロマンティックなあこがれの根底には、致富、栄達という世俗的な願望が潜んでいたものと思われる。⁽¹⁵⁾

はたせるかな、孝標女自身、自らの夢見がちな過去を「過ぎにし方のやうなるあいなだのみの心おごり」と反省⁽¹⁶⁾している。

「夢は、ある（抑圧され、排斥された）願望の、（偽装した）充足である」（フロイト『夢判断』）と言う言い方に倣うならば、ロマンティズムもまた、「ある（抑圧され、排斥された）願望の、（偽装した）充足」なのであった。孝標女の『源氏物語』愛読、物語へのあこがれは、かかるロマンティズムに発していたものではあるまいか。

そもそも、孝標女の夕顔や浮舟へのあこがれは、必ずしもその人の人生や人格の全体へ向けられたものでは決してなかった。夕顔は、「光源氏の夕顔」として夢想されたのであり、浮舟は、「宇治の大将の浮舟の女君」として捉えられていた。それは、帚木の巻で頭中将に愛されながら、正妻の嫌がらせを甘受せざるを得なかった夕顔その人でも、無論、「なにがしの院」の怪異のために落命した、夕顔の巻の夕顔でもなかった。同様に浮舟の方も、薫、匂、両者の間で苦悩し、入水に追い込まれ、やがて落飾、仏道に入るといふ運命をたどるといふ、浮舟ではなかった。

夕顔を襲った不幸、浮舟が歩まざるを得なかった運命、『源氏物語』がそれなりに追求していった女君の人生とは別のところで、幼い孝標女はそのヒロインにあこがれたのであった。

例えば孝標女が、浮舟へのあこがれを語る際には必ず、

夢に、いと清げなる僧の黄なる地の袈裟着たるが来て、「法華経五の巻をとく習へ」と言ふと見れど、人に

も語らず、習はむとも思ひかけず、物語のことをのみ心にしめて、

そこはかなきことを思ひ続けるを役に、物語をわづかにしても、はか／＼しく人のやうならむとも念ぜられず、このごろの世の人は十七八よりこそ経読み、行ひもすれ、さること思ひかけられず、からうして思ひよることは、

などと、仏道修行をせずに物語に熱中することへの後めたさが繰り返し述べられるのであるが、仏道が切実な問題であるとしたら、まず真先に浮舟の人生をこそ自らの課題となすべきであろう。しかし『更級日記』にはその形跡すら見出せない。浮舟における仏道修行の問題こそ、『源氏物語』が語り続けた末にたどりついた、最終的な問題ではなかったか。

孝標女のあこがれたのは、光源氏、薫大将という貴公子に愛される幸福に恵まれた女性としての、夕顔であり、浮舟なのであった。「光源氏ばかりの人はこの世におはしけりやは、薫大将の宇治に据ゑ給ふべきもなき世なり」という後年の落胆の言葉が、何よりそれを雄弁に語っている。

『源氏物語』一千年の享受史の上で、最初にして、最大の愛読者の記録である『更級日記』の、『源氏物語』愛読なるものの実質が、かかるものであったということは、しかし、何という歴史の皮肉であろう。作品の読解は読者の自由にまかせられるものではあるうけれど、作品成立の直後から、早くもかかる曲解が始まることには、改めて驚かされる。

例えば浮舟の人生。あるいは光源氏の一生。「後の位も何にかはせむ」という程の熱中を語りながら、孝標女は、幾多の人物の人生を通して『源氏物語』が追求しようとした問題には、殆ど関心を払わないように見える。紫式

部はこれを見ても何と見てもあろうか。

残念なことながら、『源氏物語』と孝標女とは、互いに限りなく接近しあいながら、あたかも一組の双曲線のように、ついに交わることはないまま、それぞれ歴史の彼方へ遠ざかつて行ってしまったと評せざるを得ない。

五

はしるく、わづかに見つ、心も得ず心もなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人も交らず几帳の内に向ち臥して、引き出でつ、見る心地、後の位も何にかはせむ。昼は日暮らし、夜は目の醒めたる限り、火を近く灯して、これを見るより他のことなければ、おのづからなどは、諳に覚え浮ぶを、いみじきことと思ふに、『更級日記』には、これ以上有り得ないと思われるほどの『源氏物語』への耽読が記し留められている。

しかし、これほどの愛読も『源氏物語』にとつては、単なる見当違いの耽溺でしかなかったのだろうか。さしもの熱中は、孝標女に何ものももたらさなかったものであろうか。

『源氏物語』的世界への夢破れ、物語憧憬からの回心を果す前後のことを、孝標女はこう記している。

かう立ち出でぬとならば、さても宮仕への方にも立ち馴れ、世に紛れたるも、ねぢけがましき覚えもなき程は、おのづから人のやうにも思しめてなさせ給ふやうもあらまし、親たちも、いと心得ず、程もなく籠め据ゑつ。さりとて、そのありさまの、たちまちにきら／＼しき勢ひなどあんべいやうもなく、いとよしなかりけるすゝる心にてても、ことのほかに違ひぬるありさまなりかし。

幾千たび水の田芹を摘みしかば思ひしことのつゆも叶はぬ

とばかりひとりごたれて止みぬ。その、ちは、何となく紛らはしきに、物語のこともうち絶え忘られて、ものまめやかなるさまに心もなりはて、ぞ、などて、多くの年月をいたづらにて臥し起きしに、行ひをも物語をもせざりけむ、このあらまし事とても、思ひしことゝもは、この世にあんべかりけることゝもなりや、光源氏ばかりの人はこの世におはしけりやは、薫大将の宇治に隠し据ゑ給ふべきもなき世なり、あなもののぐるほし、いかによしなかりける心なり、と思ひしみはて、まめくしく過ぐすとならば、⁽¹⁷⁾さてもありはてず、孝標女三十三歳。この間に、初めての宮仕え、そして結婚のことがあつた。孝標女の、物語憧憬からの回心は、この人生上の重大事件を契機に起つたものと覺しい。「いとよしなかりけるすゝろ心にても、ことのほかに違ひぬるありさまなりかし」。⁽¹⁸⁾正真正銘の現実⁽¹⁸⁾に否応なく直面したことが、彼女に冷静な眼をもたらしただのであらう。それはまた、「よしなかりける心」の、「ものまめやかなるさま」への転回でもあつた。

しかし、ここに注目すべきことは、他ならぬ、その転回に『源氏物語』の愛読が作用しているらしいことである。

『源氏物語』帚木の巻。雨夜の品定め⁽¹⁹⁾の女性論において、左馬頭は、妻として持つべき女性の理想について、次のように結論づけている。

今はたゞ品にもよらじ、容貌をばさらにも言はじ、いと口惜しく、ねぢけがましき覚えだになくば、たゞひとへにものまめやかに、静かなる心のおもむきならむよるべをぞ、つひの頼み所には思ひ置くべかりける。様々に論じた末に、結局のところ、「いと口惜しく、ねぢけがましき覚え」さえなければよい、というところ

に左馬頭の結論は落ち着くのだが、まさにその「ねぢけがましき覚え」がなければ、という要件が、『更級日記』にも見出されるのである。

「ねぢけがましき覚えもなき程は」。それが結婚に先立って宮仕えに出た孝標女の、心がけであつたのであろう。それは、『源氏物語』雨夜の品定めから学んだことではないのか。

やがて彼女は、生涯連れ添う夫を得て、「物語のこともうち絶え忘られて、ものまめやかなる様に心もなりはて」る。それはそのまま、左馬頭の言う、「たゞひとへにものまめやかに」という妻の理想そのままではないか。

宮仕えから結婚へと至る孝標女の心には、『源氏物語』が影を落しているのではなからうか。

又、男女の仲、色なることも、光源氏に細かに申し侍れば、今さら申すに及ばぬことなり。雨夜の品定め、こと尽き侍るべし。それも心をさまりたらん人をこそ、家刀自とも定めて、まことのよるべともし侍るべけれど、くれぐれ書かれたれば、たゞ男も女も、うか／＼しからず、正直に道理を知りたらんよりほかは、何事もいたづらごとにて侍るにや。

(一条兼良『小夜の寝覚』)

後代、『源氏物語』、特に雨夜の品定めは、女訓の書としても読まれるようになるが、期せずして、孝標女の『源氏物語』の読み方は、その先驅となつてゐる。

もともと、雨夜の品定め的女性論は、年頃の孝標女にとっては、関心の的であつたはずである。「中の品」の女を称揚する左馬頭の考えに、孝標女が賛同したであろうことは、すでに述べた。「宮仕へに出で立ちて、思ひかけぬ幸ひ取り出づる例ども多かりかし」とあつた、左馬頭の発言は、孝標女に宮仕えに出ることを促すものであつたかも知れない。まして、「今はたゞ品にもよらじ、容貌をばさらにも言はじ」という、左馬頭の結論は、

「我はこのごろろきぞかし、盛りにならば、容貌も限りなくよく、髪もいみじく長くなりなむ」という、幼い頃の幻想が、物語へのあこがれとともに費えつつあった、「盛り」を過ぎた孝標女にとっては、力強い味方であつたはずでもある。

左馬頭はさらに続ける。

あまりのゆゑよし心ばせ、うち添へたらむをば、よろこびに思ひ、少し後れたるかたあらむをも、あながちに求め加へじ。うしろやすくのどけき所だに強くは、うはべの情はおのづからもてつけべきわざをや。艶にも恥ぢして、恨みごとと言ふべきことも見知らぬさまに忍びて、うへはつれなく操づくり、心一つに思ひあまる時は、言はむかたなくすごき言の葉、あはれなる歌を詠み置き、偲はるべき形見を留めて、深き山里、世離れたる海づらなどにはひ隠れぬかし。童に侍りし時、女房などの物語読みしを聞きて、いとあはれに悲しく、心深きことかなと、涙をさへなむ落し侍りし。今思ふには、いと軽々しく、ことさらびたることなり。

論はすなわち、過剰に情緒的であることへの否定に向い、やがては、物語に典型的に描かれるような女性像の否定にも及ぶ。左馬頭自身、幼い頃の物語への傾斜への反省を告白しているが、この展開はまさに、孝標女のたどつた心の軌跡に一致するものではないか。

宮仕え、結婚、そして物語憧憬からの回心。孝標女の一連の心境の転回には、必ずや、この雨夜の品定めの一節が作用していたに違いない。すなわち、孝標女は、身をもって『源氏物語』を読んだのだと言つてよい。『源氏物語』の一節を糧に、孝標女は物語的世界への訣別を果し、現実にも立ち向うことへ回帰して行つたのではない

か。

だとするならば、『源氏物語』の愛読そのものが、『源氏物語』へのロマンティズムを打ち破ったことになる。『源氏物語』は安直なロマンスでは、決してなかった。

孝標女は、

このあらましごと、ても、思ひしことゝもは、この世にあんべかりけることゝもなりや

と、物語を否定したけれども、そのこと自体、物語の愛読によつてもたらされたものだと言うべきであろう。孝標女の内部において、物語を愛読したことは、紛れもなく大きな力を發揮していたのである。

孝標女の嘆きに対して、『源氏物語』螢の巻の物語論は次のように言う。

神代より、世にあることを記し置きけるな、り。日本紀などは、たゞ片そばぞかし。これらにこそ道々しく、くはしきことはあらめ

皆、かたゞにつけたる、この世のほかのことならずかし

物語は、虚構ではあるけれども、現実には全くあり得ないことでは決してない。「ひたぶるにそらごとと言ひ果てむも、ことの心違ひてなむありける」。物語が虚構でありながら、またそれ故に、現実を越えて真実に迫り得る、という物語論の主張は、孝標女の自覚にはかかわらず、はからずもその心の深い所で実現していたと言うべきか。孝標女は、『源氏物語』の愛読者ではあつたけれども、『源氏物語』の期待するような読者であつたとは、必ずしも言い難い。限りなく近くにあり、限りなく近づき得るはずの両者の間の齟齬は、確かに歴史の皮肉としか言えないようなことである。

しかしながら、他ならぬ孝標女の『源氏物語』愛読が、その人間的成長に作用し、さらには物語憧憬からの回心をも促したであろうこと、これは孝標女にとっても、『源氏物語』にとっても、付言して置かねばならないことであろう。⁽¹⁹⁾

注

- (1) 諸作品の引用は便宜通行本によった。
- (2) 『清少納言枕草子』一一九段（『日本古典文学大系』）には、紫式部の夫、藤原宣孝の御嶽詣のことが記されている。彼は、人目を驚かす派手な衣裳で参詣しながら、筑前守任官という利益を得たと『枕草子』は伝える。
- (3) 「孝標女が宇治川を渡って南岸頼通伝領の「宇治殿」に入りこれを見たとき、手習の巻の「宇治の院」の舞台のあとと誤認され、さてこそ浮舟がまず思い出されたのではあるまいか」（寺本直彦「更級日記「宇治の渡り」の段試解」、『源氏物語論考 古注釈・受容 所収』）。
- (4) 冒頭からすでに『更級日記』に、浮舟へのあこがれが窺えることは、前稿に論じた（『更級日記と文学史』、『成城国文学論集』二十一輯）。
- (5) これに類する、『源氏物語』および孝標女の作とも伝える『浜松中納言物語』の記事は、寺本直彦前掲論文に詳しく指摘される。
- (6) 浮舟は、洛北小野の「山里」（手習）にも住み、そこで出家するが、孝標女の関心の中心は、宇治の「山里」の方にあつたと思われる。
- (7) ただし、これは匂宮からの文。
- (8) 『紫式部日記』には、
年頃つれづれに眺め明かし暮らしつゝ、花鳥の色をも音をも、春秋にゆきかふ空のけしき、月の影、霜雪を見て、その時来にけりとばかり思ひ分きつゝ、いかにやいかにとばかり、行く末の心細さはやるかたなきものから、

とある。

また、孝標女の作とも伝える『夜の寝覚』には、

やむごとなからずとも、父母も添はず、心細げにて、思ひもかけぬ山里、蓬律のなかに、かたちありさまをかしからむ人を見出で、は、そは品ほどをたづねえらるべきにも侍らず

という一節がある。

(9) 定家自筆本には、「おや」と「なりなは」の間二字分程空白とし、傍に極めて細く小さく、それとも見えぬほどに「と」と書付けてある(玉井幸助『更級日記錯簡考』)。

(10) 『源氏物語』に「宿世の引くかたにて、なほくしきことに、ありくてなびく」(梅枝)とある。

(11) 孝標の言葉と明石御方のかかわりは、原岡文子『更級日記』の物語と人生(『女流日記文学講座 第四卷 更級日記・讃岐典侍日記 成尋阿闍梨母集』)に注意される。

(12) 孝標の発言の後半には、『源氏物語』の玉鬘にかかわる表現に似る箇所が多い。

これをやこの国に見捨て、まどはむとすらむと思ふ、

我が命も知らず、京のうちにてさすらへむは例のこと、東の国、田舎人になりてまどはむ、いみじかるべし。京とても、頼もしう迎へ取りてむと思ふ類親族もなし。 (『更級日記』)

我さへうち捨て奉りて、いかなるさまにはふれ給はむとすらむ。(中略) いづしかも京に率て奉りて、さるべき人にも知らせ奉りて、御宿世にまかせて見奉らむにも、 (玉鬘)

所狭う引き具して、言はましきこともえ言はず、せまほしきこともえせずなどあるがわびしうもあるかなと心をくだきしに、 (『更級日記』)

いさ、かの身じろきせむも、所狭くなむあるべき、なかくなる目をや見む、と思ひわづらひにたれど、 (玉鬘)

孝標女には、筑紫で成長しやがて光源氏に引き取られて一族繁栄することになる、夕顔の遺児、玉鬘への関心も小さくなかったと思われる。

(13) 『源氏物語』のなかでも、とりわけ明石入道は、夢を信じて栄達を果たした人であったが、この点においても、明石

一族は孝標女の関心に重なる存在であったと思われる。

『浜松中納言物語』にも「海の龍王に、多くの事を申しこひける夢」(巻一)とあるが、これも『源氏物語』で明石御方が「海龍王の后になるべきいつき女」(若紫)と言われていたことと無関係ではないだろう。

(14) 「親となりなば、」は、「私がそういう貴人の子を生んで」親となったなら」と解すべきであろう(佐伯梅友『更級日記の新しい解釈』)。

(15) 『更級日記』前半の紀行の部分に記し留められた、民話、伝説の類についても、孝標女は同様の関心を抱いていたものと思われる。

(16) 明石御方も我身を、「かく及びなき心を思へる親たちも、世籠りて過ぐす年月こそ、あいなのだのみに、ゆくすゑ心にく、思ふらめ」(明石)と顧みている。

(17) 「まめ／＼しく過ぐすとならば」という表現にも、雨夜の品定め「まめ／＼しき筋を立て、耳はさがちに、びさうなき家刀自の、ひとへにうちとけたる後見ばかりをして」の影響を考えることが出来る。主婦として家事に精を出す意と解すべきか。

(18) 後年の孝標女の願望の「ひとへに豊かなる勢ひになりて」というのがあり、夫、橘俊通の信濃守任官にともなう信濃下向の行粧を「人多く勢ひたり」、「いみじうきら／＼しうて下りぬ」と記していることからすれば、引用文中の「そのありさまの、たちまちにきら／＼しき勢ひなどあなべいやうもなく、いとよしなかりけるすゑる心にて、このほかに違ひぬるありさまなりかし」は、結婚を契機に榮達を果すという期待がはずれた落胆を語つたものと解することが出来る。

(19) 『源氏物語』は、共感を前面に主張して、読者の意を迎えつつ、その裏で隠微にその操作誘導を完遂してしまう(拙稿「源氏物語における読者の問題」、『国語国文』第五四卷第三号)。まさに孝標女は、『源氏物語』に操作誘導された、典型的な読者であった。